狩野光雅、穴山勝堂、野口謙次郎、太田天洋、狩野探道、根上富治、山口蓬春等々であった。

⑨ 大正末期の漆工科の授業

〔「磯矢陽　一九六九年六月十三日　漆工科ゼミ」（未定稿）抜粋〕

漆工の勉強は学校から与えられた課題をやることであった。それは表面加飾の手板教育が主で、一年生の一学期、四月から六月二十何日か迄に五枚が課題となった。初めは笹の葉、次が赤い梅で幹が金の梅の平蒔絵、その次が鱗の線描き、その間に橘、橘は真ん中のまると曲線に大変苦労した。それから門松のように一本立っていて片方が小さい五葉の松の平蒔絵であった。二学期から研出蒔絵を段々と始め、蝶鳥の研出蒔絵をやり、高蒔絵をかなりの数をこなして最後に山水肉合高蒔絵となった。

美校には川之辺一朝のいい手本もあったが戦時中になくなった。戦争の時には漆工科の部屋に兵隊が泊まり、ほかの学校の生徒も入ってきて宿舎にもなった。戦争のどさくさで手本が失われ、惜しむべきことである。

世の中が静かであったのか、確かに時間はあって、実習に取り組む時間はあった。

課題で一番てこずったのは白山松哉の牡丹である。牡丹のたかまでは肉を消して行ったが、上毛打ちという細い線は描いては削りしても結局描けなかった。帝室技芸員の白山先生が筆を選び、丹念に描いたものだから、残念ながら当然のことに思う。

金工の二階で、普通の紙の障子のある畳の部屋で仕事をした。同級生五名が一緒であった。与えられた手板に反発して、なんで若いみそらでこういう古臭いものをやらなくてはならないのかと思ったこともある。立体造形、平面造形といった言葉すらその当時は知らないので、手板に油絵風のタッチで色漆で研ぎ出をやって、鬱憤を晴らしていた。先生が大きな老眼鏡をかけていて、先生の留守の間にその老眼鏡をかけたらうまく描けるのではと思って茶目っ気半分にかけてやってみたりした。

学科では、帝室博物館の高橋健自博士の風俗史が名講義であった。万葉の歌にある風俗を語り、長歌をそらんじて流れるが如く黒板に書いて、先生自ら万葉の歌に酔っていた。万葉なるものを知ることができ、非常に為になった。絵巻にはこういう風にあると現物を見せてくれて、写真版の葉書にして学生に一枚ずつくれた。筆者は誰でどこにあるかも示された。

建築科の大沢三之助博士の家具史も名講義であった。どちらの先生も絵が上手、ことに大沢先生の家具の立面図はうまく、いろんな家具を黒板にきちっと書いた。

図案科の島田佳矣先生が、黒板絵が実にうまかった。図案法を講義して黒板に武者絵を描いてしまう。馬に乗っている武者をどんどん描くのには驚いた。ああやりたいと真似たが、とても出来ないものだった。

学科はこういうことに感銘を受け、単位制でなくて割合に自由に受けて、試験もあったのもないのもあり、先生の講義のノートを提出するだけで済んだのもある。後はもうほとんど実習の時間で良かった。週間制度でなくて、例えば月火が日本画で水曜日が塑造と

か、一週間を細かく分けていた。これは漆の仕事をするのには非常に都合がよかった。午前中仕事して午後は塑造をやるとか、午前中塑造をやって午後は実習になる。塗っては乾く間、また向こうに行ってやるという融通がきいた。

古美研には全員が行った。半月位の予定で一般の人たちが入れないような所へ入れた。美術学校の生徒に特典があったように思う。その影響が卒業制作に現れて、当時の卒業制作は仏教美術工芸品が多かった。卒業制作のための資金が出て、漆は一番高くて八〇円、彫金が五〇円、その代わり制作したものが全部文庫の、つまり国の所蔵品になった。

⑩ 工芸済々会

工芸美術の振興を期して工芸済々会が組織された。大正十四年五月十六日下谷伊豫紋に於いて発会式を挙行。会員は、板谷波山、清水亀蔵、海野清、石田英一、六角紫水、沼田一雅、佐々木象堂、杉田禾堂、赤塚自得、香取秀眞、山本安曇、北原千祿、桂光春、峰岸寶光、堆朱楊成、植松包美の十六名であった。

同会第一回作品展は同年十一月十七日から二十一日まで、京橋の高島屋呉服店で開催された。『東京美術学校校友会月報』第二十四巻第六号の「芸苑彙報」欄に記事が掲載されている。会員は工芸界の中堅、大家と目された人々であったから、各紙がこれを取り上げた。『東京日日新聞』（同年十一月十三日）は

帝展を向ふに工藝美術展覽會

濟々會半歳の苦闘　漸く十七日蓋あけの歡び

帝展に第四部工藝美術部の設置は黒田前美術院長の理想であつたがその死去によつて實現は望み少なくなつた　殊に福原新院長の帝展改革案は全然この問題に觸れようとはせず會員中にも帝展の工藝美術抱擁を喜ばぬものが多かつた、最早帝國美術院のたのむに足りぬことを知つた工藝美術家たちはいよいよ自らの力によつて起つことになり先づ斯界の第一人者板谷波山氏等の十六氏が結束して工藝濟々會なるものを起し花々しく打つて出たのは今春四月で美術界の新運動として注目されたが爾來半歳の苦心はいよいよ第一回の展覽會開催の運びにまで至り來る十七日からしかも帝展會期中力作を發表して工藝美術家の存在を世に問ふことになつた　出品すべて六十二點いづれも全力を傾けた大作である

と報じている。

大阪の工芸雑誌『汎工芸』主幹の柴崎風岬は工芸済々会を次のように位置づける。

此會は最初から作品の發表による作家の團體であつて、外に深い意味はなかつたのである。それが存續されてゐる爲、今日四部〔帝展第四部〕の實現によつて、いつしか帝展と結ぶやうに進み、今殆んど同會の會員は、帝展第四部に於て勢力を得てゐるやうである。

或は、赤塚〔自得〕氏あたりは、前の日本工藝協會が自然消滅の憂き目を見たゝめ、此の工藝濟々會をもつて社會的に工藝の擡頭をはかり、一つには帝展の四部設置へと工藝家の働きを強くせ